

あくしゆ  
握手

いのうえ  
井上ひさし

うえの こうえん ふる  
上野公園に古くからある西

ようりようりてん しゅうどうし  
洋料理店へ、ルロイ修道士

じかん き  
は時間どおりにやって来た。

さくら はな  
桜の花はもうとうに散って、

はざくら あいだ  
葉桜にはまだ間があつて、

どうぶつえん やす みせ  
そのうえ動物園はお休みで、店

なか き どく  
の中は気の毒になるぐらいす

いす た て  
いている。椅子から立って手

ふ いどころ し  
を振って居所を知らせると、

ルロイ修道士しゅうどうしは、

「呼び出だしたりしてすみませ

んね。」

と達者たっしやな日本語にほんごで声こゑをかけな

がら、こつちへ寄よつてきた。

ルロイ修道士しゅうどうしが日本にほんの土つちを踏ふ

んだのは第二だいに次じ大戦たいせん直前ちよくぜんの

昭和十五年しょうわごねんの春はる、それからしやうわず

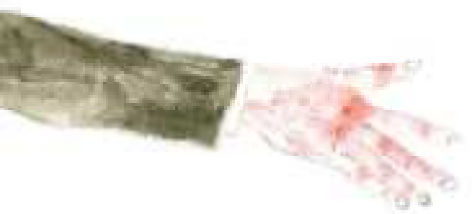
つと日本にほん暮ぐらしだから、彼かれの

日本語にほんごには年季ねんきが入はいっている。

「今度こんど故郷こきやうへ帰かえることになり

ました。カナダの本部ほんぶ修道院しゅうどういん

で畑はたけいじりでもしてのんびり  
暮ぐらしましよ。さよならを言い  
うために、こうして皆みなさんに会あ  
って回まわっているんですよ。し  
ばらくでした。」



ルロイ修道士しゅうどうしは大きな手おおてを

差し出だしてきた。その手てを見み

て思おもわず顔かおをしかめたのは、

光ひかりヶ丘がおかてん天使園しえんの子供こどもたちの

間あいだでささやかれていた「天使てんし

の十戒じっかい」を頭あたまに浮うかべたせい

である。中学三年ちゅうがくさんねんの秋あきから高

校こうを卒業そつぎょうするまでの三年半さんねはん、

わたしはルロイ修道士しゅうどうしが園えん

長ちようを務つとめる児童養護施設じどうようごしせつの厄やっ

介かいになっいていたが、そこには幾いく

つかの「べからず集しゅう」があつ

た。子供の考え出したものであるから、べつにたいしたべからず集ではなく、「朝のうちには弁当を使わべからず。（見つかると、次の日の弁当がもらえなくなるから）、「朝晩の食事は静かに食わべからず。

（ルロイ先生は、園児がにぎやかに食事をしているのを見るのが好きだから）、「洗濯場の手伝いは断るべからず。

（洗濯場主任のマイケル先生

は気前きまえがいいから、きつとバ  
ター付つきパンをくれるぞ」と  
いった式しきの無邪気むじゃきな代物しろもので、  
その中なかに、「ルロイ先生せんせいとうつ  
かり握手あくしゅをすべからず。(二に、  
三日鉛筆みつかえんぴつが握にぎれなくなっても  
知しらないよ)」というのがあつ  
たのを思おもい出だして、それで少すこ  
しばかり身構みがまえたのだ。この  
「天使てんしの十戒じっかい」が、さらにわ  
たしの記憶きおくの底そこから、天使園てんしえん  
に収容しゅうようされたときの光景こうけいを引ひ

っ張り出した。

風呂敷包みを抱えて園長室

に入っついていったわたしを、ル

ロイ修道士は机越しに握手

で迎えて、

「ただいまから、ここがあな

たの家です。もう、なんの心配

もいりませんよ。」

と言っってくれたが、彼の握力

は万力よりも強く、しかも腕

を勢いよく上下させるもの

だから、こっちの肘が机の上

に立たててあつた聖人せいじん伝でんにぶつ  
かつつて、腕うでがしびれた。

だが、顔かおをしかめる必要ひつようは

なかつた。それは実じつに穏おだやか

な握手あくしゆだつた。ルロイ修道士しゅうどうし

は病人びょうにんの手てでも握にぎるようにそ

つと握手あくしゆをした。それから、

このケベツク郊外こうがいの農場のうじやうの五ご

男坊なんぼうは、東京とうきやうで会あつた、かつ

ての収容しゆうよう児童じどうたちの近況きんきやうを

熱心ねっしんに語かたり始はじめた。やがて注ちゆう

文もんした一品いちぴん料理りやうりが運はこばれてき



た。ルロイ修道士しゅうどうしの前まえにはプ  
レーンオムレッツが置おかれた。

「おいしそうですね。」

ルロイ修道士しゅうどうしはオムレッツの  
皿さらをのぞき込こむようにしながら  
ら、両りょうのてのひらを擦すり合あわ  
せる。だが、彼かれのてのひらは  
もうギチギチとは鳴ならない。

あの頃ころはよく鳴なったのに。園えん  
長ちやうでありながら、ルロイ修しゅう  
道士どうしは訪問客ほうもんきゃくとの会見かいけんやデス  
クワークを避さけていた。たい

ていは裏うらの畑はたけや鶏舎けいしやにいて、  
子供こどもたちの食料しょくりようを作つくること  
に精せいを出だしていた。そのため  
に、彼かれの手てはいつも汚よごれてお  
り、てのひらはかしの板いたでも  
はったように固かたかった。そこ  
で、あころの頃のルロイ修道士しゅうどうしの  
汚きたないてのひらは、擦すり合あわせ  
るたびにギチギチと鳴なったも  
のだった。

「先生せんせいの左ひだりの人ひとさし指ゆびは、相変あいか  
わらず不ふ思し議ぎなかつこうをし

ていますね。」

フオークを持つ<sup>も</sup>て手の人<sup>ひと</sup>さし

指<sup>ゆび</sup>がぴんと伸<sup>の</sup>びている。指<sup>ゆび</sup>の先<sup>さき</sup>

の爪<sup>つめ</sup>は潰<sup>つぶ</sup>れており、鼻<sup>はな</sup>くそを丸<sup>まる</sup>

めたようなものがこびりつ

ている。正<sup>せい</sup>常<sup>じょう</sup>な爪<sup>つめ</sup>はもう生<sup>は</sup>え

てこないのである。あ<sup>ころ</sup>の頃<sup>ころ</sup>、

ルロイ修<sup>しゅう</sup>道<sup>どう</sup>士の奇<sup>き</sup>妙<sup>みょう</sup>な爪<sup>つめ</sup>に

ついて、天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>園<sup>えん</sup>にはこんなう

わさが流<sup>なが</sup>れていた。日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>にや

って来<sup>き</sup>て二<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>もしないうちに

戦<sup>せん</sup>争<sup>そう</sup>が始<sup>はじ</sup>まり、ルロイ修<sup>しゅう</sup>道<sup>どう</sup>士<sup>し</sup>

たちは横浜よこはまから出帆しゅっぱんする最後さいご  
の交換船こうかんせんでカナダに帰かえること  
になった。ところが日本側にほんがわの  
都合つごうで、交換船こうかんせんは出帆中止しゅっぱんちゅうし  
になってしまったのである。  
そして、連つれていかれたところ  
ろは丹沢たんざわの山やまの中なか。戦争せんそうが終お  
わるまで、ルロイ修道士しゅうどうしたち  
はここで荒れ地あちを開墾かいこんし、み  
かんと足柄茶あしがらちやを作つくらされた。  
そこまではいいのだが、カト  
リック者しゃは日曜日にちようびの労働ろうどうを戒かい

律りつで禁きんじられていいるので、ル  
ロイ修しゅう道士どうしが代だい表ひょうとななつて  
監かん督とく官かんに、「日にち曜よう日びは休やすませせて  
ほほしい。そその埋うめ合あわせは、他た  
の曜よう日びにききつとすする。」と申もうし  
入いれた。すすると監かん督とく官かんは、「大だい  
日にっ本ぽん帝てい国こくの七しち曜よう表ひょうは月げ月げ火か水すい  
木もく金きん金きん。ここの国くにには土ど曜ようも日にち曜よう  
もあありやせせんのだ。」と叱しかりつ  
け、見みせしめめに、ルロイ修しゅう道どう士し  
の左ひだりの人ひとさし指ゆびを木きづちちで思おも  
い切きりたたき潰つぶしたたのだ。だ

から気きをつけろ。ルロイ先生せんせい  
はいい人ひとにはちがいないが、  
心こころの底そこでは日本人にほんじんを憎にくんでい  
る。いつかは爆発ばくはつするぞ。：  
：しかし、ルロイ先生せんせいはいつ  
までたっても優やさしかった。そ  
ればかりカルロイ先生せんせいは、戦せん  
勝国しょうこくの白人はくじんであるにもかかわ  
らず敗戦国はいせんこくの子供こどものために、泥どろ  
だらけになつて野菜やさいを作りつく  
鶏にわとりを育そだてている。これはど  
ういうことだろう。

「この子供をちやんと育て  
てから、アメリカのサーカス  
に売<sup>う</sup>るんだ。だから、こんな  
に親<sup>しん</sup>切<sup>せつ</sup>なんだぞ。あとでどつ  
と元<sup>もと</sup>をとる気<sup>き</sup>なんだ。」という  
うわさも立<sup>た</sup>ったが、すぐ立<sup>た</sup>ち消<sup>き</sup>  
えになった。おひたしや汁<sup>しる</sup>の実<sup>じつ</sup>  
になった野菜<sup>やさい</sup>がわたしたちの  
口<sup>くち</sup>に入<sup>はい</sup>るところを、あんなに  
うれしそうに眺<sup>なが</sup>めているルロ  
イ先生<sup>せんせい</sup>を、ほんの少<sup>すこ</sup>しでも疑<sup>うたが</sup>  
っては罰<sup>ばつ</sup>が当<sup>あ</sup>たる。みんなが

そう思い始めたからである。

「日本人は先生に対して、ず

いぶんひどいことをしました

ね。交換船の中止にしても国

際法無視ですし、木づちで指

をたたき潰すに至っては、も

うなんて言っていないか。申し訳

ありません。」

ルロイ修道士はナイフを皿

の上に置いてから、右の人さ

し指をぴんと立てた。指の先

は天井を指してぶるぶる細か



く震ふるえている。また思おもい出だした。ルロイ修道士しゅうどうしは、「こちら。」とか、「よく聞ききなさい。」とか言う代かわりに、右みぎの人ひとさし指ゆびをびんと立たてるのが癖くせだった。

「総そう理り大臣だいじんのようなことを言いってはいけませんよ。だいたいい、日に本ほん人じんを代だい表ひようしてものと言いったりするのは傲ごう慢まんです。それに、日に本ほん人じんとかカナダ人じんとかアメリカ人じんと叫いったようなものがあると信しんじてはなり

ません。一人一人の人間がい  
る、それだけのことですから。」

「わかりました。」

わたしは右の親指をぴんと  
立てた。これもルロイ修道士  
の癖で、彼は、「わかった。」「よ  
し。」「最高だ。」と言う代わり  
に、右の親指をぴんと立てる。  
そのことも思い出したのだ。

「おいしいですね、このオム  
レツは。」

ルロイ修道士も右の親指を

立てた。わたしは、はてなと心こころ  
の中で首なかをかくびしげた。おいし  
いと言いうわりには、ルロイ修しゅう  
道士どうしに食しょく欲よくがない。ラグビー  
のボールを押し潰おしたような  
かっこうのプレーンオムレツ  
は、空くう気きを入いれればそのまま  
グラウンドに持もち出だせそうで  
ある。ルロイ修道士しゅうどうしはナイフ  
とフォークを動うごかしているだ  
けで、オムレツをちちつとも口くち  
へ運はこんではないのだ。



「それよりも、わたしはあなたをぶつたりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちしうちをしませんでしたか、もし、  
していたなら、謝あやまりたい。」  
「一度いちどだけ、ぶたれました。」

ルロイ修道士しゅうどうしの、両手りょうての人ひとさし指ゆびをせわしく交差こうささせ、打ちつけうちつけている姿すがたが脳裏のうりに浮うかぶ。これは危険きけん信号しんごうだった。この指ゆびの動きうごでルロイ修道士しゅうどうしは、「おまえは悪い子わるいこだ。」とどなっているのだ。そして次じには、きつと平手打ちひらてうが飛とぶ。ルロイ修道士しゅうどうしの平手打ちひらてうは痛いたかった。

「やはりぶちましたか。」

ルロイ修道士しゅうどうしは悲かなしそうな

ひょうじょう  
表情ひょうじょうになつて、ナプキンを折お  
り畳たたむ。食事しょくじはもうおしまい  
なのだろうか。

「でも、わたしたちは、ぶた  
れてあたりまえの、ひどいこ  
とをしでかしたんです。高校こうこう  
二年にねんのクリスマスだつたと思おも  
いますが、無断むだんで天使園てんしえんを抜ぬ  
け出だして東京とうきょうへ行いつてしまつ  
たのです。」

よくあさ  
翌朝よくあさ、上野うえのへ着ついた。有楽町ゆうらくちよう  
あさくさ  
や浅草あさくさで映画えいがと実演じつえんを見みて回まわ

り、夜行列車やこうれつしゃで仙台せんだいに帰かえった。

そして待まっていたのがルロイ  
修道士しゅうどうしの平手打ちひらてうだった。「あ

さつての朝あさ、必かならず戻もどります。

心配しんぱいしないでください。捜さがさ

ないでください。」という書かき

置おきを、園長室えんちょうしつの壁かべに貼はりつ

けておいたのだが。

「ルロイ先生せんせいは一月間いちがつあいだ、わた

したちに口くちをきいてくれませ

んでした。平手打ちひらてうよりこつ

ちのほうがこたえましたよ。」

「そんなこともありましたね  
え。あのときの東京見物の費ひ  
用は、どうやってひねり出だし  
たんです。」

「それはあのとき白状はくじょうしまし  
たが……。」

「わたしは忘わすれてしまいまし  
た。もう一度いちど教えてくれませ  
んか。」

「準備じゆんびに三さんか月げつはかかりまし  
た。先生せんせいからいただいたじゆんもう純毛  
の靴下くつしただの、つなぎしたぎの下着だ



のを着きないでとっておき、えきまえ駅前  
の闇市やみいちで売うり払はらいました。けいしや鶏舎  
からにわとり鶏ごを五、ろくわも六羽持だち出だし  
て、焼やき鳥屋とりやに売うつたりもし  
ました。」

ルロイしゅうどうし修道士は改あらためてりよう両  
手ての人ひとさし指ゆびを交こう差ささせ、せ  
わしく打うちつける。ただしあ  
の頃ころと違ちがって、顔かおは笑わらってい  
た。

「先生せんせいはどこかお悪わるいんです  
か。ちつとも召めしあがりませ

んね。」

「少しすこ疲つかれたのでしよう。こ  
れからせんだい仙台のしゅうどういん修道院でゆっく  
り休やすみます。カナダへたつ頃ころ  
は、前まえのような大食おおぐらいに戻もど  
っていますよ。」

「だつたらいいのですが……。」  
「仕事しごとはうまくいっています  
か。」

「まあまあといったところで  
す。」

「よろしい。」

ルロイ修道士しゅうどうしは右みぎの親指おやゆびを

立たてた。

「仕事しごとがうまくいかないとき

は、この言葉ことばを思い出おもして出だして

ださい。『困難こんなんは分割ぶんかつせよ。』

あせってはなりません。問題もんだい

を細こまかく割わって、一つ一つ地道じみち

に片かたづけていくのです。ルロ

イのこの言葉ことばを忘わすれないでく

ださい。」

冗談じょうだんじゃないぞ、と思おもった。

これでは、遺言ゆいごんを聞きくために会あ

ったようなものではないか。

そういえば、さっきの握手もあくしゆ

なんだか変へんだった。「それは実じつ

に穏おだやかな握手あくしゆだった。ルロ

イ修道士しゅうどうしは病人びょうにんの手てでも握にぎ

るようにそつと握手あくしゆをした。」

というように感かんじたが、実じつは

ルロイ修道士しゅうどうしが病人びょうにんなので

はないか。元園長もとえんちやうは何かの病やまい

にかかり、この世よのいとまご

いに、こうやって、かつての

園児えんじを訪たずねて歩あるいているので

はないか。

「日本にほんでお暮くらしになっ  
て、楽たのしかったことがあつた  
とすれば、それはどんなこと  
でしたか。」

先生せんせいは重おもい病びよう気きにかかつて  
いるのでしよう、そして、こ  
れはお別わかれの儀ぎ式しきなのですね  
ときこうとしたが、さすがに  
それははばかられ、結け局つきよくは、  
平へい凡ぼんな質しつ問もんをしてしまった。

「それはもう、こうやってい

るときに決まっています。天使園で育った子供が世の中へ出て、一人前の働きをしてい  
るのを見るときがいつとう楽しい。何よりもうれしい。そう、あなたは上川君を知っていますね。上川一雄君ですよ。」

もちろん知っている。ある春の朝、天使園の正門の前に捨てられていた子だ。捨て子は春になるとぐんと増える。陽気

がいいから、発見はっけんされるまで長ながくかかってても風邪かぜを引ひくことはあるまいという、母親ははおやたちの最後さいごの愛情あいじょうが春はるを選えらばせるのだ。捨すて子ごはたいてい姓名せいめいがわからない。そこで、中学ちゅうがく生せい、高校生こうこうせいが知恵ちえを絞しぼって姓名せいめいをつける。だから、忘わすれるわけはないのである。

「あの子こは今いま、市営バスしえいばすの運うん転手てんしゅをしています。それも、天使園てんしえんの前まえを通とおっている路線ろせん

の運転手うんでんしゅなのです。そこで、月つきに一度いちどか二度にど、駅えきから上川君かみかわくんの運転うんでんするバスに乗り合あわせることがあるのですが、そのときは楽たのしいですよ。まずわたしが乗のりますと、こんな合図あいずをします。

ルロイ修道士しゅうどうしは右みぎの親指おやゆびをぴんと立たてた。

「わたしの癖くせをからかってい  
るんですね。そうして、わたしに運うんでん転てんの腕前うでまえを見みてもらい



たいのでしようか、バスをぶ  
んぶん飛ばとします。最後さいごに、  
バスを天使園てんしえんの正門前せいもんまえに止とめ  
ます。停留所ていりゅうじよじゃないのに止と  
めてしまうんです。上川君かみかわくんは  
いけない運転手うんてんしゅです。けれど  
も、そういうときがわたしに  
はいつとう楽しいたののですね。」  
「いっとう悲かなしいときは：

…？」

「天使園てんしえんで育そだった子こが世よの中なか  
に出でて結婚けっこんしますね。子供こどもが生う

まれます。ところがそのうちに、夫婦ふうふの間あいだがうまくいかなくなる。別居べっきよします。離婚りこんします。やがて子供こどもが重荷おもになります。そこで、天使園てんしえんで育そだった子こが、自分じぶんの子こを、またもや天てん使園しえんへ預あずけるために長ながい坂さかをとぼとぼ上のぼってやっくて来くる。それを見みるときがいつとう悲かなしいですね。なにも、父子ふし二代にだいで天使園てんしえんに入はいることはないんです。」

ルロイ修道士は壁の時計を  
見上げて、

「汽車が待っています。」

と言、右の人さし指に中指

をかからめて掲げた。これは

「幸運を祈る」「しっかりおや

り」という意味の、ルロイ修

道士の指言葉だった。



うえのえき ちゅうおうかいさつぐち まえ  
上野駅の中央改札口の前

おもき  
で、思い切つてきいた。

せんせい し こわ  
「ルロイ先生、死ぬのは怖く

ありませんか。わたしは怖く

てしかたがありませんが。」

かつて、わたしたちがいた  
ずらを見つ<sup>み</sup>かったときにした  
ように、ルロイ修道士は少し<sup>すこ</sup>  
赤<sup>あか</sup>くなって頭<sup>あたま</sup>をかいた。

「天国<sup>てんごく</sup>へ行く<sup>い</sup>のですから、そ  
う怖<sup>こわ</sup>くはありませんよ。」

「天国<sup>てんごく</sup>か。本当<sup>ほんとう</sup>に天国<sup>てんごく</sup>があり  
ますか。」

「あると信<sup>しん</sup>じるほうが楽<sup>たの</sup>しい  
でしょうが。死<sup>し</sup>ねば、何<sup>なに</sup>もな  
いただむやみに寂<sup>さび</sup>しいところ  
へ行く<sup>い</sup>と思う<sup>おも</sup>うよりも、にぎや

かな天国てんごくへ行くいと思おもうほうが  
よほどたの楽しい。そのために、  
この何十年間なにねんあいだ、神様かみさまを信しんじて  
きたのです。」

わかりましたと答こたえる代かわ  
りに、わたしは右みぎの親指おやゆびを立た  
て、それからルロイ修道士しゅうどうしの  
手てをとって、しっかりと握にぎっ  
た。それでも足たりずに、腕うでを  
上下じょうげに激はげしく振ふった。

「痛いたいですよ。」

ルロイ修道士しゅうどうしは顔かおをしかめ

てみせた。

上野公園の葉桜が終わる

頃、ルロイ修道士は仙台の

修道院でなくなった。まもな

く一周忌である。わたしたち

に会って回っていた頃のルロ

イ修道士は、身体中が悪い

腫瘍の巣になっていたそうだ。

葬式でそのことを聞いたとき、

わたしは知らぬ間に、両手

の人さし指を交差させ、せわ

しく打ちつけていた。